



産休サンキュープロジェクト・ニュースレター

2015年11月号

Vol. 5

「ありがとう！」～支援で助かった命～

ケニア・ガルバチュウラの病院や診療所がない村では、月1回、保健省と赤十字の合同チームによる巡回診療が実施されています。体調不良を抱えた多くの住民が診察を受けに来ます。

ビリキ村では、お母さんが下痢と発熱で体調をこわしている2歳の娘ラリアちゃんを連れて来ました。ここでは安心な飲料水や手を洗うための水の確保が難しく、下痢を起こす要因になっています。クリニカルオフィサー(医師に準じた有資格者)が診察の後、解熱剤と整腸剤を処方しました。お母さんは「巡回診療でクリニカルオフィサーに診てもらえるので安心します」と話してくれました。



タナ村では、看護師が母子手帳を確認しながら乳児に予防接種(BCG、3種混合ワクチンなど)と経口ポリオ生ワクチンを内服させました。日本では乳児への予防接種は当たり前ですが、ここでは赤十字の支援が入る前はほとんど行われていませんでした。この予防接種により、たくさん子どもたちが病気になることなく乳幼児期を乗り切り、これからの人生を健康に送れることが期待されます。



巡回診療では、妊産婦検診や乳幼児健診も行われています。

また、別途開催される月1回の健康教育では、妊産婦検診や医療施設での出産、完全母乳保育の大切さ、家族計画等を伝えています。

エスコット村での妊婦健診に来たファウジアさんは、貧血のため、鉄剤の処方を受けました。



「健康教育を受けたことで、妊産婦検診と医療施設での出産の大切さを知り、この子(上記の写真下)を出産しました。今では周囲の人にも健診と医療施設での出産を勧めるようになりました」とファウジアさんは語ります。



ファウジアさんが左手に持っている紫色の物はケニアの母子手帳です。

お母さんの妊娠中や、産後の経過、赤ちゃんの体重、予防接種の実施、育児方法のアドバイスなどが記載されています。



「産休サンキュープロジェクト」とは

出産を機に、生まれたいのちと支えてくれる周囲の人に感謝し、日本で産休・育休を推進し、寄付によって開発途上国の子どもとお母さんを支援し、一緒に子どもたちを育てていくプロジェクトです。

毎年4月・11月に発行されるニュースレターでは、ご支援いただいている事業報告のほか、親として共感できるような出産・育児の話、子どもを取り巻く保健リスク、日本での子育ての知識/子どものケガの手当てと予防/疾病予防等を紹介していきます。

社内外のプロジェクト支援者への配布や、社内報等での啓発、あるいは御社・貴団体のCSR活動報告等にご活用ください。

「現地のほっこり話やびっくり話」

～皆様からいただいたご質問・ご要望にお応えして～



「赤十字の精神に感動し、誇りをもって活躍しているボランティア紹介」

赤十字の草の根レベルの活動に欠かせないボランティア。各地域の保健ボランティアを率いるチームリーダーを紹介します。

彼らは地元の人々の健康状態をきめ細やかに把握し、フォローしています。また、月1回の健康教育では、医療施設での出産と妊産婦検診の重要性、マラリアやエイズ、結核などの病気の症状や予防、対策について住民に教育を行っています。

ほとんどのチームリーダーが約7年間、赤十字の支援活動に携わっています。



ボジ村のチームリーダー：ハッサンさん

「健康教育の効果により、検診をきちんと受ける妊婦さんや、医療施設で出産する妊婦さんが増え、やりがいを感じています。」



タナ村のチームリーダー：サフィアさん

「私自身、子どもを連れて来ています。赤十字の活動に誇りを持っています。」(写真右は日本赤十字社の近藤松子 前・駐在員)



ガファルサ村のチームリーダー：アブディさん(中央)

「健康教育で『衛生』について教えてきたことにより、住民たちが毎月、清掃週間を決めて村の掃除をしています。健康教育の効果が出ていて、嬉しいです。」



ビリキ村のチームリーダー：アデンさん

「健康教育の効果により住民たちの知識が向上し、巡回診療や医療施設を利用する人が増えています。」



タナ村の副チームリーダー：ムハメドさん

「妻(左の写真のサフィアさん)がチームリーダーなので、健康教育の講座には子どもをあやしながら参加しています。」

「赤ちゃんとお母さんの命を守る手術棟が完成、医療機器が勢ぞろい」

皆様のご支援によりガルバチュウラ県立病院の手術棟が完成しました。他からのご支援も合わせ、自然分娩だけでなく、帝王切開や自然分娩の際にも赤ちゃんやお母さんの命を守る医療機器も整備されました。

この病院の手術棟の建設は、地元住民と保健省の切なる願いから始まったものでした。

地元住民、ケニア政府（保健省など）、ケニア赤十字社、日本赤十字社、その他のパートナーとの連携と協働により、ようやく完成に至りました。

1人/1組織では達成できないことも、多くの人/組織が連携・協働することによって実現できるという事例となりました。同様に、「産休サンキュープロジェクト」も、1人/1社ではできない開発途上国の地域保健/母子保健支援を、日本の多くの方の想いを集結し、協働することにより実現しています。引き続き、1人でも多くの方の知っていただき、支援の輪がますます広がっていくよう、皆様のご協力をお願いいたします。



ガルバチュウラ県立病院の手術室
医療機器について説明する麻酔科医。



新生児用体重計
正確に体重を測る事はとても重要です。



インファントウォーマー
生まれたばかりの赤ちゃんの体温が下がらないようにこの温めた台(左)にのせ、酸素を投与したり、口や喉に溜まった分泌物の吸引をして、上手く呼吸ができるよう促します。

「2015年ママバッグが完成！」

2010年から実施する母子保健事業の一環で、日赤がウガンダ赤十字社とともに製作、配付しているママバッグ。2015年バージョンが完成しました。

ママバッグはウガンダ北部13地区のヘルスセンターで、妊婦が4回の産前健診を受け、出産する際に手渡されます。まだまだ自宅出産が多い地域で、女性が産前健診のためにヘルスセンターに行くことを習慣づけ、医療従事者の介助のもと衛生的で安全に出産できるよう支援しています。

今年のママバッグの特徴はエコバッグを採用したこと。2013年～2014年は強度のあるビニル製バッグを使用していましたが、ウガンダでも最近「エコ」意識の高まりがあるようで、首都の大型スーパーではレジ袋を有料とし、マイバッグ持参を推奨しています。出産後の女性たちがママバッグをエコバッグとして再利用してくれると嬉しいですね。

ママバッグには、助産師が使用する滅菌手袋、止血用の脱脂綿、へその緒をしぼる結紮糸(けっさつし)、赤ちゃん用タオルやシーツ、石鹸、剃刀などが入っています。現地の要望に応じて毎年内容を見直し、2015年版は分娩台に敷くビニルシート、滅菌手袋を1枚増やしました。既に各地で配付を始めており、支援を必要とする女性3,000人に届く予定です。

6年にわたる日赤の支援。ウガンダ北部を支援する国連機関や保健省も、今年から日赤の内容を参考にママバッグの製作を始め、さらに広い地域の女性たちをカバーできるようになっています。





「RSウイルス に注意！」

～日本での子育ての知識／子どものケガの手当／疾病予防のご紹介

今回は、昨年の冬、ニュースでも話題になったRSウイルス感染症がテーマです。

RSウイルス感染症は、主に冬に流行するウイルス感染症で、大人や年齢の高い小児では単なる風邪で済むことが多いですが、新生児（特に早産児）や1歳未満の小児では重症な下気道感染を起こすことがあります。



<症状>

発熱、咳、鼻水などの風邪の症状が数日続いた後、7割近くは治りますが、3割は炎症が下気道にも及び、細気管支炎や肺炎を起こします。重症化するとむくみと分泌物により空気の通り道が狭くなり、とても呼吸が苦しくなります。呼吸が速くなったり（多呼吸）、呼吸の際にゼイゼイ、ヒューヒューなどの音（喘鳴）が聞こえたりする症状が見られるような場合は、治療が必要になります。突然呼吸が止まる無呼吸発作、脳症などの重篤な合併症もあります。潜伏期間は2～8日間、感染後のウイルス排出期間は3～8日間です。

<感染予防対策>

初感染は0～1歳までが最も多く、3歳までにほぼ100%の小児が1回は感染し、その後も生涯にわたり何度も感染を繰り返しますが、その多くは鼻水などの軽い症状です。今までは冬期に流行する疾患と言われていましたが、最近では7月頃からの感染の報告もあるようです。感染経路としては鼻水や咳、くしゃみを介した飛沫感染や接触感染となるため、マスクの着用や手洗い、おもちゃなどのこまめな消毒が効果的です。大人や年齢の高い子どもは症状が軽く自覚症状があまりないので、ちょっとした風邪症状でも注意しましょう。

<抗体注射（シナジス）>

感染により重症化しやすい早産児、肺や心臓に基礎疾患があるお子さんを対象に、シナジスという抗体の注射を毎月行うことにより重症化を防ぐことができます。

1歳未満のお子さんにうつさない様にする事が大切なポイントです。

ご家族全員で毎日しっかり手洗い・うがいをしましょう！



【情報提供：葛飾赤十字産院】

子育てに関する各種教室を開催しています。詳しくはホームページへ。

葛飾 赤十字

検索

産休サンキュープロジェクトに関するご意見・ご要望をお寄せください。特に、ニュースレターの内容については、参加企業・団体の皆様とのコミュニケーションツールとなりますので、ご提供いただける情報、どのような情報がお知りになりたいか、素朴な疑問からご感想まで、是非、皆様の声をお聞かせください。

また、ニュースレターのデータ配信をご希望される方もこちらまでご連絡ください。

日本赤十字社 国際部 開発協力課 産休サンキュープロジェクト担当

電話：03-3437-7089

Eメール：sankyuthankyou@jrc.or.jp

